

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

62

2009
1008

空は深く澄み渡り、さわやかな季節となりましたが、皆様におかれましては健やかに過ごしのことと存じます。さて、都市史研究会ニューズレター62号をお届けいたします。

本号では2009年6月および9月に開催されたラウンドテーブルのご報告に加え、東京大学グローバルCOEプログラム「都市持続再生学の展開」と8月に共催いたしました「都市フィールドワークの開拓——陣内秀信先生にうかがう」をご紹介します。また、本年度に入り出版された書籍および11月に開催予定のシンポジウムの案内を掲載いたします。

ラウンドテーブル「18世紀南インドの植民地都市」

6月13日、東京大学文学部法文1号館215教室において、水島司氏（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）をお招きしてラウンドテーブルが開催されました。当日是水島氏のレクチャーに加え、活発な議論が行なわれました。以下に参加記を掲載いたします。

参加記

今回のラウンドテーブルは、「18世紀の南インド植民地都市」を題材として、水島氏が長年取り組んでこられた研究成果の一端をご紹介いただいた。18世紀は、インドの植民地化が本格化し、領土経営と結びついて植民都市が定着・成長し始めた時代に当たる。この時代は植民都市の形成を議論する上できわめて重要な意味を持つが、一方で歴史的な記録の読解が極めて難しく、当時の都市の実態については、まだ詳らかでない部分も多い。今回、これに関連する貴重な講演を拝聴する機会に恵まれた。僭越ながら、以下でその概要を紹介し、感想を述べたい。なお、筆者は建築史あるいは都市史を専門としていないため、不勉強な記述についてはどうかご容赦願いたい。

レクチャーは二部に分けて行われた。第一部は「植民都市の成長と南インド社会の変動」である。ここではマドラス（現チェンナイ）とボンディシェリーという当時の南インドを代表する植民都市を対象とし、その経済活動の詳細な調査から導き出された都市の人口・社会の実態をご紹介いただいた。無論、この時代は公的機関による統計的な記録の存在などは期待できない。主要な資料は当時の商人が遺した取引記録や日記が主体となる。レクチャーではこれらの記録を題材に、当時の印欧間取引の形式、多様な度量衡制度、また労働者賃金など植民都市を舞台とした経済活動の実態が示された。特に、都市における穀物消費量や価格については詳細な検討の紹介があり、これをもとにした都市人口を推計結果が示された。

第二部は「18世紀南インド都市における騒乱」である。かつて南インドには「右手」「左手」とよばれる伝統的な社会

集団が存在した。この右手・左手の区分はサブカーストによる区分を貫く縦の区分と位置づけられ、左手に対する右手の優位という基本的な秩序体系を形成していた。レクチャーでは、都市における交易の拡大によるとりわけ左手側の経済的実力の伸張により、左右の秩序階梯が混乱し、抗争に至ったことが紹介された。大きなトピックとしては、左手の経済的な成長とそれに伴う秩序階梯への抗議運動の進展、都市内の領域を巡る抗争、そして最終的な運動の沈静化が取り上げられた。また植民都市の成長による在地社会の変容の例として、ミーラース体制とその解体の過程についても紹介があった。

以上のレクチャーを受け、大田省一氏を中心にコメントがあった。その後の質疑においては、植民都市の存在による社会の変化、特にミーラース体制の変容に関して質問・議論が集中した。そこでは、生産物ならびにサービスの取り分と結びついた社会システムであるミーラース体制が、植民都市を舞台とした経済活動の進展に伴い解体されたことは、植民都市の存在が在地社会に与えた影響として極めて大きな意味を持つことが改めて示された。また、その解体の過程で注目すべき点として、体制と直結する様々な職分が徐々に取引の対象となることで在地社会から遊離していったことが紹介された。

個人的な感想としては、都市の交易活動の記録から、都市の人口・社会の実態を検証するという水島氏の研究のアプローチに大きな関心を持った。東南アジアや南アジア、さらには西アジア地域の都市・建築の研究に関しては、19世紀以前の都市の状況をどのように検証するのが一つの難問として存在する。氏のアプローチは、これを打開するものとして大変有効なものと思われる。大いに今後の参考としたい。右手・左手の対立による都市空間の分割、さらにはその後の変化については、議論する時間が少なく残念であった。またの機会に詳細なレクチャーをお願い申し上げたい。

蛇足ではあるが、今回のレクチャーで興味をもたれた方にはチェンナイならびにボンディシェリーへの訪問をおすすめしたい。いずれの都市もかつての植民地時代の都市空間を保存する貴重な都市である。

池尻隆史（東京理科大学）

ラウンドテーブル「ヨーロッパ史の中のイギリス近代都市」

9月14日、法文1号館115号室においてマイルズ・テイラー氏（ロンドン大学・歴史学研究所所長）をお招きしてラウンドテーブルを開催いたしました。「ヴィクトリア女王とインド」と題されたテイラー氏の報告を受け、活発な討議が行なわれました。以下に参加記を掲載いたします。

参加記

今回のラウンドテーブル「ヨーロッパ史の中のイギリス近代都市」は、イギリスの歴史学研究所（Institute of Historical Research）所長、王立歴史学会（Royal Historical Society）理事であるマイルズ・テイラー教授を招いて行われた。テイラー教授は19世紀イギリスのチャーティズム研究、急進主義研究の第一人者として知られているが、現在では19世紀イギリスの政治・文化をヨーロッパ、帝国との関係から意欲的に分析し、新たな研究領域を切り拓きつつある。ラウンドテーブルはテイラー教授の報告「ヴィクトリア女王とインド」に始まり、近藤和彦氏、伊東剛史氏（日本学術振興会特別研究員）のコメントに続いて質疑応答が行われた。19世紀イギリス史は必ずしも筆者の専門ではないが、当日の報告と質疑応答の内容について簡単に紹介したい。

テイラー教授の報告は19世紀イギリスのヴィクトリア女王のインドに対する文化的興味、関心の背後にあった政治的な意図について論じたものであった。テイラー教授によると、ヴィクトリア女王のインドへの興味関心は多分に東洋的、エキゾチックな文化への関心として始まったが、その文化的関心には、国内での政治状況からイギリス国王としての権力を自由に行使できないことに対する不満、そして権力行使にそのような制限を受けることのないインドという地における支

配者としての地位確立という政治的動機が密接に関わり合っていた。ヴィクトリア女王が、インド皇帝 (Empress of India) という称号を公的に付与される前から私的に好んで用いていたことにはそのような背景があった。1857年のインド大反乱の際も、インドからの情報を文字だけではなく絵画や写真など多様な手段で集め、重大な関心を寄せていた。ヴィクトリア女王のインドに対する関心はインドにおける彼女の存在感を強め、現在インドの主要都市における立像やモニュメントでも、一番多く見受けられるのはヴィクトリア女王のそれである。従来の帝国史においては、イギリス帝国拡大の要因として経済的、軍事的要因が強調されてきたが、テイラー教授はそれに加えて個人の政治的動機や意思が果たした役割は無視できないことを強調し、さらにヴィクトリア女王のこうした政治的動機がいかに文化的関心に結びついていたかを多様な史料を用いて論証した。

テイラー教授の報告に対しては、伊東氏がテイラー教授の報告の研究史的な位置づけを確認した上で、ロンドンにおけるレジャーや大衆文化の発展と帝国の関連という観点からコメントを行った。近藤氏のコメントの後質疑応答が行われた。質疑応答では様々な質問や議論が交わされたが、テイラー教授の博識により議論はヴィクトリア女王についてだけではなく、19世紀イギリスの文化・社会全般に拡大した。中でも興味深かったのは19世紀イギリスの都市についての質問である。近代ドイツやフランスの都市建設や都市計画においては「都市のアイデア」と言うべきグランド・デザインが存在し、それに基づいて政府や市当局の強力なイニシアティブのもとに都市の大改造が行われたが、イギリスではそのような「アイデア」と呼ぶべきものはあるのかどうかという質問であった。テイラー教授は、イギリスでは政府の財源不足によりヨーロッパにおいてみられたような大規模な都市改造は行われず、都市の拡大や改良は私的な拠金 (subscription) によって行われ、大規模な改造が行われる場合は主に貴族によって行われる私的なものであった、と回答した。ただし植民地の都市の場合は異なり、植民地都市の建設にはそのようなアイデアと呼ぶべきものが存在するかもしれない、ということであった。植民地都市とヨーロッパ都市との比較研究はいまだに蓄積がなく、今後積極的に行われるべきである、という認識をテイラー教授は述べていた。

このように報告後は活発な議論が行われたが、個人的な感想としては、テイラー教授のアジア史についての関心の高さが印象に残った。質疑応答にもあったように、ヨーロッパと植民地、アジアの都市の比較という観点は研究が不足しており、今後進展が期待される分野である。その意味で、今回のラウンドテーブルのように外国人研究者を招き議論を交わすことは非常に重要であり、今後も継続して行われることを期待したい。

久保山尚 (エディンバラ大学大学院博士課程)

ラウンドテーブル「都市フィールドワークの開拓——陣内秀信先生にうかがう」

東京大学グローバルCOEプログラム「都市持続再生学の展開」東京フィールド研究会との共催により、8月5日、陣内秀信氏をお招きしてラウンドテーブルを開催いたしました。東京フィールド研究会の代表者である初田香成氏による当日の報告を掲載いたします。

当日の報告

8月5日、ぐるーぷ・とらっど3と東京フィールド研究会（東京大学グローバルCOEプログラム「都市空間の持続再生学の展開」）の共催で、法政大学の陣内秀信氏を招き、「都市フィールドワークの開拓——陣内秀信先生にうかがう」と題した公開講演会を行った。ここでは当日の司会と東京フィールド研究会の代表者という立場から報告をさせていただく。

東京フィールド研究会（略称：東京F研）とは、初耳の方も多と思うが、個々の町のフィールドワークを通じ、新たな方法論の構築と江戸東京の都市史の一端を明らかにすることを目指す会である。東京大学の建築、社会基盤、都市工学



「陣内流都市研究の着眼と方法」(前半)の様子



「陣内先生の著作を読む」(後半)の様子

の三専攻の学生が主体となり、そこに先生方を迎える形で運営を行っている。研究会で既往研究のレビューを行う中で、ぜひ一度お話をうかがいたいとして名前が挙がったのが、陣内氏であった。氏は言わずと知れた著名な建築史家であり、イタリアを中心に世界各地でフィールドワークを行ってこられるとともに、『東京の空間人類学』（1985年、筑摩書房）を初め、江戸東京に関する著作も多い。研究会で議論を進めた結果、講演会では陣内氏のこれまでの問題関心の系譜をたどり、その都市史研究の全体像を明らかにするとともに、フィールドワークの方法論という観点から研究会メンバーと討議を行っていただくという大それた方針が立てられた。

当日の講演会は、その名も「陣内流都市研究の着眼と方法」と題した陣内氏によるレクチャーから始まった。まず到着直後にオイルショックが起きたという水上都市ヴェネツィアへの留学の回想から、そこでの都市体験や当時のイタリアでの保存再生の動向が研究の出発点となったことが語られた。そしてその経験を活かして日本で研究を進めたこと、一方でそれでは捉えられない日本的な歴史の継承について「空間人類学」と呼ぶ新たな学問を構想したこと、ウォーターフロント開発が進むなか、アジア型の開発・再生モデルを探して中国に進出した様子などが語られた。さらに話はその後、次々と進出していったイスラーム圏や、アンダルシア、南イタリア、東京郊外にまで及んだ。一ヶ所にとどまらずにスケールの大きなフィールドワークが展開されるとともに、東京での経験がその後再びヴェネツィアで生かされ、サルディーニャでの経験が東京郊外で生かされるなど、各地での経験が相互連関的に活かされていった様子が印象的であった。また近年はエコ地域デザイン研究所を立ち上げられ、エコロジーや田園、農業も視野に入れながら、エコミュージアムの提案など、歴史研究にとどまらず今後の都市づくりに積極的に関与していく姿勢が示された。

後半は「陣内先生の著作を読む」と題して、研究会メンバーが『都市を読む イタリア』（1988年、法政大学出版局）、『東京の町を読む』（1981年、相模書房）、『東京の空間人類学』（1985年、筑摩書房）、『東京 郊外の地域学』（1999年、私家版）の4つの著作を取り上げ、その解題をおこなうとともに、当時の問題意識について質問形式で答えていただいた。ここではあえて挑発的と思われるような質問にも真摯に答えていただき、「都市のサーベイはカッコをつけないと駄目」、「歴史の人がやらないと誰も（あるべき都市づくりを）やらない」といった会場全体を盛り上げるような応答もあった。氏の「教育者」としてのセンスも随所に感じられるものであった。

全体として氏の研究が当時の社会的背景とリンクし次々と展開してきた様子が興味深く、その上、我々が直接存じ上げない著名な先生方との交流も具体的なエピソードでいきいきと語っていただけたことは、当時の都市史の研究状況を知るうえでもきわめて価値の高いものであった。一方で、後半の研究会メンバーの発表では、氏の方法論の展開過程に焦点を当てたために、最終的に氏が獲得した方法論の全体像が何なのか、曖昧になってしまったのではないかと、という声も終了後に寄せられた。また氏の地球規模での研究に対し、メンバーの力不足もあり海外の著作が扱えなかった点、時間の見込みりが甘かった点なども反省点として挙げられる。会は午後6時に始まり、午後9時前という当初の予定をはるかにオーバーし、熱のこもった討議が終了したのは実に午後10時頃であった。

また特筆される点として、当日は学生や教員のみならず、一般の方々も多数参加した点が挙げられる。入場者数は記名

していただいた方だけで86名、総数では100名を越えたと思われ、盛況であった。

初田香成（東京大学）

出版物のご紹介

都市史研究会の活動成果より以下の出版物が発行されましたので、ご紹介させていただきます。とくに、『パリと江戸——伝統都市の比較史へ——』と『バスティード——フランス中世新都市と建築——』は11月に開催されるシンポジウム「伝統都市の比較史」でも取り上げます。

高澤紀恵、アラン・チレ、吉田伸之編 別冊都市史研究『パリと江戸——伝統都市の比較史へ——』（山川出版社、2009年）

前近代有数の巨大都市であるパリと江戸を、伝統都市というカテゴリーで括り、それぞれの社会＝空間構造の深みと細部から、相互の都市社会の構造的な特質を、比較類型論的に把握しようとする試みの最初の成果。（出版元ウェブサイトより）

飯田市歴史研究所編 飯田・下伊那史料叢書 近世史料編『飯田町役用古記録』（飯田市歴史研究所発行、2009）

「飯田・下伊那史料叢書」は、当地方の歴史を知る上で基礎となる古文書や記録などたくさん歴史資料を、史・資料集として編集・刊行するシリーズです。

今回は、江戸時代飯田町の役人であった人物が、自分の業務に役立てようと、他の町役人の家に残されていた慶長6(1601)年から宝暦9(1759)年ごろまでの役務記録から、町で起こった出来事・訴訟・法令などをピックアップして書き留めた「役用古記録抄帳」を翻刻・出版しました。（長野県飯田市ウェブサイトより）

伊藤毅編 『バスティード——フランス中世都市と建築——』（中央公論美術出版、2009年）

バスティード（bastide）とは、13世紀半ばからおよそ100年の間にかけて建設された一群のヨーロッパ中世新都市のことで、約300から500の都市が確認されている。本書は2005年から「バスティード研究会」が行ってきた、創立の歴史的考察から、詳細な実地調査報告までを含む3年度にわたる一連の共同研究の成果である。（出版元ウェブサイトより）

シンポジウム「伝統都市の比較史」開催のお知らせ

11月14日、15日の両日、都市史研究会シンポジウム「伝統都市の比較史」が開催されます。伝統都市に関心を寄せる研究者および学部・大学院学生諸兄のご参加をお待ち申し上げます。詳しい内容については漸次ウェブサイトやメールにてお知らせいたします。

なお、下記の予定は、やむを得ない事情により変更になる場合があります。

日程：2009年11月14日（土）、15日（日）

会場：東京大学本郷キャンパス法文1号館2階215番教室（例年と会場が異なりますのでご注意ください）

会費：500円

11月14日（土）14時～17時30分

ラウンドテーブルⅠ「民衆世界——都市社会の比較史——」

書評1）高澤紀恵著『近世パリに生きる——ソシアビリテと秩序——』（岩波書店、2008）

評者：吉田伸之氏（東京大学）

書評2）高澤紀恵・アラン・ティレ・吉田伸之編『パリと江戸——伝統都市の比較史へ——』（山川出版社、2009）

評者：河原温氏（首都大学東京）

全体コメント：林田伸一氏（成城大学）ほか

11月15日（日）9時30分～17時20分

個別報告（9時30分～12時30分）

1）三倉葉子氏（東京大学）「近代京都の町と土地所有——北之御門町を事例として」

2）戸田穰氏（東京大学）「建築・出版・イメージ」

3）西坂靖氏（専修大学）「江戸の呉服店の売場と奉公人——三井越後屋を事例として」

ラウンドテーブルⅡ「空間と社会」（14時～17時20分）

書評1）伊藤毅編『バスティード——フランス中世新都市と建築——』（中央公論美術出版、2009）

評者：高橋慎一郎氏（東京大学）

書評2）高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市——史料の魅力、日本とヨーロッパ——』（東京大学出版会、2009）

評者：伊藤毅氏（東京大学）

全体コメント：伊藤裕久氏（東京理科大学）ほか

司会：岩淵令治氏（国立歴史民俗博物館）

フランス建築通史の旅

丁周磨（東京大学）

今回の目的

この度9月16日～23日の日程で行われたフランス調査旅行に同行させていただくことになった。参加したのは、これまでわれわれが行ってきた「バステード研究会」のメンバーである東大建築学専攻の伊藤毅教授、日本女子大史学科の加藤玄准教授、東大西洋史の坂野政則氏で、伊藤研究室修士の私が旅程の取りまとめを担当した。実は今回は目的が大きく二つあり、一つはわれわれが執筆した『バステード——中世フランス新都市と建築——』の完成を現地協力者らに報告すること、そしてもう一つは今年度から始まった「沼地研究会」の調査として、フランス国内の干拓地を視察し、現地の研究者とコンタクトをとることである。多忙をきわめる参加者の都合に合わせたギリギリの日程であったため、伊藤・坂野・私の三人は成田21:55発の深夜便でまずパリへ向かい、ニームで加藤氏と合流することにした。大移動をともないながら各地で現地の研究者らとの面会を挟み込んだ非常に慌ただしい旅行ではあったが、充実した内容で終えることができた。ここでは今回の旅での出来事を綴ってみようと思う。

ローマの遺跡からカマルグの沼地まで

早朝の4時過ぎに到着してからTGVの出発時間までの三時間あまりを、閑散とした空港の中で過ごすこととなった。予想していたよりも気温はぐっと低く、空模様もすっきりしない。南へ向かえば晴れてくるだろうと期待しつつも、先に現地入りした加藤氏の電話によってニームの雨天を知る。列車が到着してみたら土砂降り、宿が駅前だったことがせめてもの救いだったが、なんともイマイチな調査初日を迎えた。

この日の予定はニームの見学のみで、気軽に名所史跡をまわることにした。ノーマン・フォスター設計のカレ・ダールや旧市街の教会をいくつか見学したが、中でも興味深かったのが町の北に位置するヴォーバン式の要塞跡で、そこにニーム大学のキャンパスがすっぽりとそのまま収まっている。やはりこの町は遺跡であふれているようでキャンパスの裏手にはローマ時代の貯水・分水池があった。

最後は円形闘技場を見る。ローマ時代からの遺跡といつつ、新しい石もかなり使われているようである。上層へ上ってもまったく転落防止柵が付けられていないのが自己責任の徹底したヨーロッパらしい。落ちるギリギリのところまで近づき、眼下にニームの町を見下ろしてみる。この頃にはもう雨は上がっていた。

翌17日。この日が晴れていなかったらこの旅行は暗い印象のまま終わっていただろう。朝から申し分のない快晴であった。レンタカーを借り、運転は伊藤教授、私が助手席でナビゲーションを

するという格好で一路アルルへと向かう。途中ジャン・ヌーベル設計の集合住宅である「ネモージュス」を横目に見つつ、一時間もしないうちに市内へ到着。車を置いて旧市街を散策する。アルルといえばゴッホも有名だが、時間がないので今回は割愛し、ローマの遺跡にしばって町を見学した。こちらはニームより観光地化が進んでいて、どの遺跡もきれいに保存、修復されていた。円形闘技場ももちろん修復中で、石から削られた白い粉塵がレストランの建ち並ぶ周囲を容赦なく俵っていた。

午後再び車を走らせ、町の北に位置するTrébonという地区へ向かった。ここは17世紀にオランダ人技師らが開発した地区である¹。直線的な街区が続くが、遺構らしきものはほとんど残っていない。ここはただ通過するのみにして、今回の旅の第二の目的地である、カマルグの湿地帯を目指す。間もなく目の前には先に現地入りした加藤氏が言うところの「散文的」な風景が広がる。湿地帯と言えど干拓してあるので一見して普通の農地のような土地が延々と広がるだけにしか見えない。目印になるものがまるで存在しないので、ナビ役の私が最初の目的地であったカマルグ博物館を素通りさせてしまった。

かつての羊小屋を利用したカマルグ博物館では古地図やカマルグの生活史を紹介していた。建物内部に入ると湿気を感じるようになるとともに、名物の蚊も目についてきた。車のドアの開閉で何匹か侵入してしまったようだ。それはともかく再び車を走らせるとようやく沼（ヴァカレス湖）が見えてきた。地中海かと思いがうほど巨大な沼で、車でなければ到底まわりきれないものであるが、自転車ツーリングを行う強者たちが多くいたことに驚かされた。

カマルグの最後に訪れたのは巨大塩田があるサラン・ド・ジローで、ここの塩は名産物としてフランス国内中で名が知れている。長方形に区画割りされた広大な塩田の脇に、（おそらく完成品の？）塩の山がどつかりと盛られている、こちらも人間の



カマルグの巨大な沼（ヴァカレス湖）

¹ Ciriacono, S., trans. Scott, J., Building on water: Venice, Holland, and the construction of the European landscape in early modern times, Oxford, 2006.

スケールをはるかに超えた風景が広がっていた。

時間が余ったので急遽ポン・デュ・ガールを見学することにした。思ったより早く到着したが、午後の6時を回っていたので観光客の姿はまばらでむしろゆっくりと見学することができた。今回の旅のコンセプトはとりあえず「ご覧になる」こと。せっかく南仏にまで来たからには見られるものはできる限り見ておこうというものだ。

ヴィルフランシュ・ド・ルエルグ、バステード再訪

翌18日、300キロほど離れたニーム-ヴィルフランシュ・ド・ルエルグ間を車で移動した。モンペリエ郊外を抜け、(またしても)雨の中高速道路にのって2時間ほど走ったところ、フォスター設計による「ミヨー橋」が目前に現れた。今回二つ目のフォスター作品は高低差300メートルほどもある谷を通過する、だがそれを感じさせないくらいスレンダーな橋である。高い技術力とデザインを誇らしげに見せつけるようなその姿はさながら現代のポン・デュ・ガールである。

バステード研究所(CEB)はヴィルフランシュの中心広場に移転していた。ここは2005年、2006年とわれわれがバステード実地調査を行ううえで、多くの現地関係者との取り次ぎを行ってくれた機関であり、『バステード』刊行が実現したのもひとえにこのCEBの協力があつたからである。この日は所長のカルメット氏だけでなく、調査都市の市長、助役、住人など、われわれの訪問にあわせて多くの方々に集まっていただいた。伊藤教授がこれまでの調査協力に対して感謝の念を述べた後、地元新聞の記者も交えて全員でシャンパンを交わし、調査時の思い出や本についての話に花を咲かせる。今回の旅のメインイベントにふさわしい盛大な会となった。

ところで「バステード研究会」のメンバーは、そのまま「沼地研究会」へと統合されることになっていた。その翌日に赴いたトゥールーズは、そのための出向であった。この日面会したのはトゥールーズ大学附属研究所の副所長アベ氏と所長オリヴィエ



氏。同研究所は南フランスとスペインを中心とした地域を対象に、CEBでの会合(中央が所長のカルメット氏)

さまざまな側面からの学際的な研究を行っており、特にアベ氏は干拓、灌漑といったテーマについての興味深い論文を発表している²。われわれ「沼地研究会」での都市と水に関する研究にも興味を示していただき、今後共同研究を行うことで合意を得ることができた。

ナント、ひとつの町の歴史

トゥールーズでの面会后、TGVで5時間半を駆けパリへと移動した。加藤氏は翌日帰国し、残った三人でナント日帰り旅行へ向かう。ジュリアン・グラックというナント出身の作家がいるが、伊藤教授は彼の『ひとつの町のかたち』というエッセイを読んで以来この訪問を待ち望んでいたという。

駅から徒歩でブルターニュ公爵城へと向かう。ここは現在ナント市の歴史博物館となっているが、この日はフランスの「文化遺産の日」で、無料で解放されていた。展示は非常に充実しており、古代と中世、奴隷貿易を経て近代の工業化へいたるまでのナントの明快なる歴史の全貌を一気に知ることができる。

午後には市内各地を巡る。ナントはロワール河に面する町だが思いのほか起伏に富むようだ。市内随一の規模を誇るパサージュ・ポムレーは世にも珍しい3層からなるパサージュである。旧市街の南に位置するフェイドー島はもともと中州だったところを、奴隷貿易商人らが開発した地区である。各商家のファサードにはアフリカ系の人物や、海の神々を彫り込んだレリーフが掲げられており、行き交う人々を上から睨みつける。現在は両側が埋め立てられ旧市街と陸続きになっているのだが、こんなところにも「沼地研」のテーマが転がっているのだと、感心してしまう。その後さらにジャン・ヌーベルの裁判所、ラカトン&ヴァッサルの建築大学といった現代の作品まで見学し、この日は一日にしてナントの通史を体得した気分であった。

パリ、大いなる賭け

パリについてからは天候に恵まれた。この町もいろいろ見だすときりがないので、二日かけて建築にかかわる博物館などを巡ることにした。最初はアンヴァリッドにある「立体地図博物館」。ここは18世紀にフランス陸軍が国の防衛のために制作した、都市の詳細なジオラマを展示している。コンピュータのシミュレーションなど存在しない時代、陸軍兵士はこれらを用いて戦闘地の地勢を頭に叩き込み、突撃の作戦を立てたという。地形はもちろんのこと、建物の窓や煙突までも再現してあるので、模型作品としての完成度も高い。

模型といえば近年オープンした建築・遺産博物館もフランス国内の建築のレプリカや模型を数多く展示している。私も留学中を

² Abbé, J.-L., À la conquête des étangs : L'aménagement de l'espace en Languedoc méditerranéen (XIIe - XVIe siècle), Toulouse, 2006.

含めて五回以上は通っているが飽きることがない。ちなみにこの日は「Grands Pari(s)」という昨年行われたプロポーザルの展示も行われていた。これは今後のパリ都市圏の開発ビジョンを提示させた招待プロポーザルで、パリの「s」の綴りに括弧がついているのは、「pari=賭け」という語に引っ掛けるためである。サルコジ大統領が主導ということもあって一般市民の注目度も高い。

私は今年の2月にもパリを訪れているが、今回約半年ぶりに訪れてみて、この町は大きく変わりつつあるという印象を強く受けた。例えばパリでは現在建築の高さ制限が強力な規制として存在しているが、それを再び解除しようという議論も盛んに行われて

いるようだし、町を歩いてみるといたる所で公衆トイレ、バス、メトロ、公共自転車など、新しい設備が次々に導入されているのが見受けられた。インフラ、治安、移民、などさまざまな問題を抱えたこの大都市が、「19世紀の首都」を脱却し今後、国際都市としての存在感を保持することができるか。その運命を決定づける大いなる賭けが、今まきに行われていた。

古代遺跡から最新の建築・都市事情まで、一週間という限られた時間の中、フランス建築通史を網羅したような調査旅行であった。といっても実はこれは序の口のようなもので、伊藤教授は休む暇もなく次の調査地、そして「沼地研究会」のフィールドとなるオランダ・フリースラント州へと向かい、パリを出発した。

News Letter 都市史研究 Vol. 62
2009年10月8日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内
編集担当：三倉葉子（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）